

## 18世紀ドイツ小説理論についての一考察 ゴットシェート『文学批判試論』を手がかりに

北原 寛子

### 1. はじめに

この研究ノートは、ここでは簡略に述べるにとどまる研究課題と、そのための仮説に基づいてヨハン・クリストフ・ゴットシェート Johann Christoph Gottsched (1700—1766) の『文学批判試論』第四版 Versuch einer critischen Dichtkunst. Vierte sehr vermehrte Auflage (1751)<sup>i</sup> を解釈する試みである。この試みを通じて、仮説の正当性を少しでも示すことができたならばさいわいである。

筆者が取り組み続けている研究課題とは、教養小説 Bildungsroman というドイツ文学史における重要概念を再検討することである。現在この概念は、ゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』 Wilhelm Meisters Lehrjahre (1795/6) から帰納的に打ち立てられた近代ドイツ特有の小説のジャンルで、若者の成長物語であり、これによって読者の成長にもよい影響を与えるべきであるとされている。<sup>ii</sup> 教養小説という用語が現在、主人公の成長を描いている作品を指して使われていることには、筆者は異議をさしはさむものではない。

しかしこの概念が、ゲーテの小説に基づいて打ち立てられたという考えについては、まったく賛同することができない。<sup>iii</sup> その根拠は次のようなものである。

18世紀ドイツにおけるさまざまな文学理論を読むならば、小説は教育的であるべきだとする主張が広範にみられる。小説は積極的に登場人物の心理的動機にいたるまで詳述し、どうすれば徳のある人間になることができるのか、その過程を描くことで教育的効果を生み出すことができると論じられていた。<sup>iv</sup> そのようなわけで、主人公の成長を描くタイプの小説が『修業時代』によって成立したか、あるいは確立されたのではなく、ゲーテの作品が登場する以前から、小説というジャンル一般が登場人物の成長を描き読者に教育的効果を与えるべきであるという考え方が広がっていたことが認められるのである。

『修業時代』はたまたまそのような時代と文化を背景にして登場し、作品の質にたいして高い評価を受けたために、よい小説は教育的小説であるという固定観念によって教養小説の代表作とみなされるようになったにすぎない。<sup>v</sup> この教養小説概念の成立にかんする拙論が現在なおまとまった成果の形をとっていない以上、仮説と呼ばれることを甘受しなくてはならない。しかしゴットシェートの『文学批判試論』を分析することによって、この仮説により明確な根拠を与えることができるであろう。

### 2. ゴットシェートの小説にかんする主張について

『文学批判試論』は第一版が1729年、第二版が1737年、第三版が1742年に出版され、1751年の第四版が最終版として有名である。小説についてまとまった章が設けられているのは、第四版にいたってようやくであるという。<sup>vi</sup> 全体はまえがきにひき続き、ホラティウスの『詩論』がラテン語の原文で掲載されている。ゴットシェート自身によるドイツ語訳と多くの脚注が添えられ、見開きで原文と翻訳を対照できるように工夫が施されている。続く本編は第一部と第二部に分かれ、第一部では文学全般について述べられている。第二部は二つに分かれ、第一節は「古代に考え出された文学について」と

と題され、頌詩や歌曲、寓話、叙事詩、諷刺詩、牧歌、悲劇、喜劇、書簡などが章ごとに解説されている。第二節はソネットやマドリガル、ロンドーなどの小歌曲の形式をはじめ、カンタータやセレナード、オペラ、歌謡劇、バレエなど近代に成立したとされるジャンルのために割かれている。小説が中心的に論じられているのは第二部第一節の第五章である。800 頁を超える大著のなかで 26 頁は絶対的に多いとは言いがたいが、他章と比較してみるとバランスがとれているので、これでよしとせねばならないだろう。そこでこの章についてまず中心に検討してみることにしよう。

章の表題は「ミレトス風の寓話、騎士読本、小説について」である。たんに小説についてではなく、3つのカテゴリーが並列されていることに注目したい。この事実は、これらが同じ章で論じることを可能にする共通の特徴と、それにもかかわらずなお別々の名称が必要であるという相違点を備えていることを示している。まずこの3つのジャンルの共通点であるが、それはまず形式にかかわることである。押韻しない自由な文体、つまり散文で書かれていることがあげられている(505)。つぎにその内容について規定していて、恋愛を主なテーマとして扱っている点が指摘されている(505f)。ゴットシェートは、これらの物語は大部分かあるいはすべてが創作されているのだから論争の余地なく文学に属すると主張している(506)。このような言及がなされるということは、言外に反対意見の存在を暗示していることになる。

ゴットシェートは文学の起源は歌謡であり、その成立から聴き手への音響的效果を重視する韻文が文学の始原的形態により近いものであるという論を展開している(82ff., 225 u. s. w.)。ゴットシェートは文学の発生は次のようであったと主張している。太古の昔に人びとは素晴らしい歌手に聴きほれ、賞讃を惜しまなかった。こうした優れた歌手は人間を超えているか、あるいは神の助力を受けていると考えられた。詩人たちもそのような状況を受け入れざるをえず、彼らは自分たちの技にまつわる優れた思いつきを実行するのみならず、それを強化するように努めていたという。このために彼らは魅力的な事柄を自分たちの歌に盛り込み、聞き手たちをますます魅了しひきつけることができるよう切磋琢磨したという。奇跡的なことや常ならざる何かが含まれたちょっとした物語や寓話は、当時の素朴な世界にふさわしいものだった。古代の人々は乳母の話に興味いっぱい聞き入る子どものようにこれに夢中になったという。やがて古代の人々が生活の場を森の外へと拡大させるにいたり、豎琴にあわせて神々や英雄にまつわるさまざまな寓話を披露してくれていたアンピオンやオルフェウスのあとを追って出てきたのだという(89)。このようにして音楽の伴奏をともなった歌は詩を発展させ、文学へと拡大していったのだという。そしてさらに文学は想像力によって生み出されるという究極の状態へと進化したことになる(356)。この文学の起源にまつわる説は、客観的事実から論理的に推論したのではなく、神話的人物まで登場し、想像力の産物とさえ思われるロマンに満ちあふれている。しかしこの点は文学理論を考察するにあたってとても重要に思われる。なぜならならば、数多くの人名と作品名を挙げることでゴットシェートの文学理論は客観性を示しているが、議論の大枠を決定する根本的な段階で、想像力が重要な役割を果たしているからである。文学理論においては諸現象があまりに複雑で把握が困難であるために、しばしば想像力が大きな役割を果たすことがある。想像力の介入を受けた理論は、その客観的な有効性を弱められてしまう。しかし論者たちの想像力を映し出す鏡のような、彼らの想像力をありたい頭から取り出して陳列するための枠のような文化的な側面が際立つことになり、理論の目的からは逸脱するが精神史として興味深く読めるのである。

この章で扱われるミレトス風寓話と騎士物語、小説という3つのジャンルの共通点が創作された出来事、おもに恋愛にまつわることがらを散文で書き記したものだとするれば、相違はどこにあるのだろうか。それはゴットシェートの論じ方を分析すると、時代による区分だということができる。ミレトス風寓話は

ギリシャ・ローマの古典古代から伝わる作品群をさしている。キュロス二世とアレクサンダー大王の間、つまり紀元前 6-4 世紀に書かれた作品はすべて散逸したというが、ミレトスのデュオニシスやシチリア出身のクレアキュス、シリア人のアメリウスなどゴットシェートがさまざまな文献から探し出した名前が挙げられている (507)。古典古代から、ローマでは 4 世紀のテオドシウス帝の治世のころまで、ギリシャでは 12 世紀の東ローマ帝国の皇帝マヌエル一世コムネノスの時代にいたるまでがミレトス風寓話にかんする記述で挙げられている (511)。ゴットシェートは寓話 Fabel を文学の本質的な形態の一つとして非常に重視している。寓話とは、教訓を内容の展開の寓意にこめた道德の改善のために創作された物語であり (150)、文学のあらゆるジャンルの魂であり、根源であるという (148)。ミレトス風寓話の特徴は、ゴットシェートが寓話の古典であり模範とみなしているイソップ物語<sup>vii</sup>との比較で説明されている。イソップ物語が動物や植物によるたとえ話によって構成されているのにたいし、ミレトス風の寓話は人間が登場し、実際に起こり得そうな感覚を与えているのがまず最初の大きな違いである。またイソップ物語が読者の役に立つという寓話の根本的な機能を前面に打ち出しているのにたいし、ミレトス風寓話は読者の娯楽のためという機能が際立っており、文体も享樂的で、名もない人びとの恋愛が描かれるのだという (514)。

騎士読本 Ritterbücher はミレトス風寓話と一部時代が重複するが、騎士たちが登場する作品なので単純にそのような名称が与えられていると思われる。しかしゴットシェートはこの点について特別に言及していない。6 世紀のアーサー王と彼の円卓の騎士にまつわる物語から、13 世紀のギヨーム・ド・ロリス作『ばら物語』によって Roman という語が記録に登場するころまでをさしている。騎士読本の質については、ゴットシェートは行為の一貫性がたもたれていないと厳しい評価を下している (514f.)。ヨーロッパ人たちの祖先にあたるゴート人やロンゴバルト人、ブルグント人たちにも詩や寓話、物語、英雄詩があったはずだが、文字で書き記されることがなかったために、長い期間の内に忘れ去られてしまったと説明されている (518)。その後アーサー王や騎士フニバルト・フォン・テューリンゲン、カール大帝らの時代に彼らを題材にした作品がつくられていったと記述されている。11 世紀に南仏プロヴァンスで活躍したトルバドゥールやコンタドゥールなどと呼ばれた詩人たちにも言及し (520)、彼らがこうした作品を口頭で広めていったとしている。ゴットシェートはこれらの作品をラテン語のくずれた農民語で編まれていると紹介している (521f.)。

小説 Roman という語が最初に用いられるのは先に言及した『ばら物語』Roman von der Rose 以降、つまり 13 世紀以降で、その後散文の物語を指す名称として使用が広まったという (521)。ゴットシェートは Roman という語の起源を次のように記述している。フランスでは、当時メロヴィング家やカロリング家出身の王がドイツ語系の言語を宮廷で話し、官僚・官庁語はラテン語であったという。ガリアがローマに支配されていたために、この言葉を受け入れざるをえなかったのである。ローマ人の言葉とみなされていたので、romanisch と呼ばれた。農民たちが話したラテン語が lingua romana rustica と呼ばれ、これで語られたり書かれたのが Romance とよばれるようになったという。騎士読本がその内容がほとんどすべて恋愛であったために、いつの間にか Romane と呼ばれるようになったとしている。この語源にまつわる説明は、彼が広範にわたる言語学の研究を通じて文献を調査したことを根拠に言及していると思われる。というのも現在一般に使用されている語源辞典の記述とも一致するので、その後の研究によっても裏付けられているといえるからである。この客観性と、先に挙げた文学の起源にまつわる想像力豊かな独自の論理の組み合わせが、この文学理論書に独特の味わいを与えている。

このようにして、騎士読本がしだいに小説という新たなカテゴリーへと移り変わり、散文による娯樂的

な英雄物語、恋愛物語などが徐々に創作されていったとされている。ゴットシェートは『ドン・キホーテ』のなかでも主人公の愛読書として紹介されている『アマディス・デ・ガウラ』、『ドン・ベリアニス』などのスペインの作品や、マクシミリアン帝を主人公にした作品『トイヤーダンク』から、『阿呆物語』やアントン・ウルリッヒ・ブラウンシュバイク公が著わした『オクタヴィア』などのバロック時代の作品にいたるさまざまな作品を通時的に紹介することによって、小説というジャンルの継続的な発展を実証的に説明しようとしている。

こうして進化してきた小説について、ゴットシェートはよい作品を判断する基準を5つ提示している。第一に、小説は英雄詩の類と異なって歴史上の有名な名前は登場しないのだという。というのも、恋愛は普通の身分の人にも起こりうるからで、彼らは偽名で隠されていてもよい。しかし物語により重みを与えるために有名な英雄の物語を選ぶのを妨げるものではないとして。第二に語りの秩序にかんしては、歴史的で時系列に沿うべきであるという。韻文詩は技巧的にすることもできるが、小説は物語の規模が大きくなりすぎないように努め、叙事詩にならないようにしなければならない。第三にゆりかごから墓場までを、つまり主人公の生涯の長い期間を描いてはいけけないのだという。小説は主人公の主要な行為のみを語るのがふさわしく、もし全生涯を描くのだとすると神々や精霊、魔女などからの不思議な力を必要とする英雄詩と区別がつかなくなるという。第四に書き方・文体にかんしてであるが、ドイツでは長い間文学的に、つまり大げさかつ誇張するのが流行っていたが、理性と真実にふさわしい自然さで語る方が感情により大きな影響を与えるので今後改めなくてはならないという。小説の文体は歴史的になるほどより美しく、これによって機知や繊細な言葉、うまく考えだされた文章が穏やかに活きてくるので、そのような書き方を目指すべきだという。最後に、よい小説は道徳に害を与えてはならないという。その例としてゴットシェートは、ミレトス風寓話を紹介した部分でも紹介していたヘリオドスの名を挙げ、その無垢で貞節な主人公たちを称えている。ゴットシェートに近い時代の例では『パメラ』を挙げている(527f.)。

ここまで小説が論じられている第二部第一節第五章を中心に分析してきたが、ここでのちの教養小説理論へと継承されていく特徴が小説理論にみとめられるかどうかという問題にあらためて立ち返ってみたい。この問いにたいしては、否定と肯定の両方の答えが必要である。否定の答えをしなくてはならないのは、ディルタイ以降の教養小説理論が、教養小説は主人公の生涯を描くべきだと定義しているのにたいして、ゴットシェートはむしろそれを避けるべきだと主張しているからである。彼はよい小説の5つの条件に挙げているように、小説は恋愛などの出来事のみを扱うべきであって、もし人の生涯といった長いスパンを扱うならば叙事詩との境界があいまいになるとの危惧を表明している。しかしゴットシェートのこの態度をもって、人生を描くという点での教養小説的小説像の萌芽が18世紀の小説理論に存在しないのではないかと疑う必要はない。というのも叙事詩は新たに創作される作品が減少しその数十年で衰退の一途をたどるのにたいし、小説はいよいよ盛んに創作され受容されていくのだが、その過程で叙事詩のあらたな時代にあわせて変形された形式とみなされるようになっていくからである。

<sup>Viii</sup> こうしたその後の傾向を考慮してゴットシェートの立場を観察するならば、18世紀小説理論展開の一過程が認められることになるのである。

ゴットシェートの小説理論には、教養小説理論でいうところの主人公の発展・人格形成 *Bildung* という発想は欠けているが、18世紀末から19世紀にかけての小説理論でしばしば観察され、主人公の人格形成と混同され、やがてそちらの意味合いへと比重が移り変わっていくことになる小説が読者にとっての教育的機能を果たすべきだという考え方は明確に認めることができる。彼の文学理論においては、寓話が文学の根本的な形態であり、小説をはじめとするさまざまなジャンルは寓話の変形、つまりバリ

エーションと考えられている。寓話そのものに読者への教育的機能が付与されているので(167, 503)、読者への教示は小説だけの問題にとどまらず、文学そのものにとって根本的な課題とみなされている。そこでこの点について詳しく分析するために、寓話をはじめとした彼の文学理論の特徴について次に確認することにしよう。

### 3. ゴットシェートの文学全般にたいする態度について

ゴットシェートの文学理論の特徴は3点指摘することができる。第一に挙げられるのは、寓話 Fabel を文学の根本的形式にとらえ、他を寓話のデフォルメとみなしていることである。寓話が他のジャンルよりも上位に位置する包括的概念であり、文学の根本的形態とされていることはさきに指摘した箇所からも明らかである。さらにゴットシェートは、寓話はいろいろな文学作品に応用可能で、作品の規模にかかわらず混ぜることができ、それによって有用な作品を作ることができると主張している(168)。逆の見方をすると、ジャンルにかかわらず文学は寓話的特徴を保持すべきと考えられていることがいえる。このために彼は、文学が道徳的な教科書と本当の歴史の中間的形態とみなせると述べている(167)。そして彼は「道徳に徹すると、大多数の人々にはあまりにも無味乾燥すぎる。[...]しかし歴史は、学識を有しないものにとってそれを読むこと自体が心地よいものであっても、ほとんど教化的ではない。

[...]これにたいして文学は、歴史よりも教化的で、道徳よりも心地よい。文学は教え、かつ楽しませ、そして学識のあるものにもないものにもふさわしい。学識のあるものは、自然の技巧的な模倣よりもとりわけ詩人の巧みさに驚嘆し、学識のない者は文学を楽しくて啓発的な暇つぶしとみなすであろう」

(167)と書き記している。このようにホラティウスが主張した文学の「楽しませつつ教える」という規範を、ゴットシェートは文学の原則と考えていたことがわかる。彼はさらに、文学は道徳の改善だけでなく、当時趣味 *Geschmack* という用語で表現されていた美を判断するための精神的な能力の改良にも役立つと論じている。趣味は生得の能力ではなく学習の成果であり、大人になってからも鍛錬が可能であるので、文学をとおして向上が図られるべきであるとしている(126ff.)。またそのために詩人にたいしても悪を憎んで徳を愛し、道徳の向上に努め、そのような精神をもって創作するように求めている(313ff.)。

ゴットシェートは彼の文学の基本原則から省みて、小説にやはり物足りない部分があることを、「ありきたりの小説があまりほめられた意図で書かれていないことはだれもが認めるとおりである。その編纂者は真の道徳のみならず文学の諸規則をあまり理解していない。そのようなわけで彼らが恋の迷路を他人の心の中に築き、むなしくも愚かさをごちゃごちゃに織り込み、好色な読者をなおさらに色気づかせ、無垢なものたちを誘惑しようとするのは驚くに当たらない」(168)と指摘している。しかしゴットシェートは多くの小説が道徳という観点からすると不足があることを認めつつも、小説を文学には不適格として排除することはしていない。先の部分に続けて「もしこれらの作品が敬虔であるとするならば、ヘリオドスやロンゴス、セルヴァンテスやフェヌロン、『ネオプトレモス』を書いたシャンシアージュらがなしたように英雄詩の様式で書かれなくてはならない」と模範的な作品を例示することで、より理想的な姿への発展を促そうとしているように思われる。ブランケンブルクの『小説試論』においては、小説が比較的近代に成立したジャンルであるとみなされていることへの負い目か、小説を読むことに道徳的教育機能があることを強調していた。彼のそのような態度は、ゴットシェートのような権威者が文学全体に保証していた機能を小説にも付属すると意識的に強調することで、文学としての小説を広く認知させようとするねらいがあったのかもしれない。かたやゴットシェートには、小説にどのような質の作品が

含まれようと、それが文学に属することを疑っている様子はほとんど見受けられない。逆にギリシャ古典時代の散文による恋愛物語をミレトス風寓話と名付けて寓話の亜種であることを認めたり、長い歴史があることを提示しており、小説にたいするリベラルな態度が印象的である。

ゴットシェートの文学理論の第二の特徴として挙げられるのは、その独特の歴史観である。小説についての章を検討した際に確認できたように、彼はギリシャ古典から18世紀の作品を時代順に列挙している。ジャンルの呼称が移り変わるとはいえ、2000年以上の時を経ながら、過去と18世紀当時の間に時代を画する出来事は想定されておらず、彼が自分たち当時のヨーロッパ人を古典古代文化の直系の継承者と認識していたことがわかる。そういうわけで彼の文学理論には、シラーが『素朴文学と情感文学について』(1795/6)で描き出したような古代と近代の対立はまったく見られない。むしろの過去の文化への全幅の信頼がにじみ出ている。実際に彼は、この著書に採用した理論は自分の頭で考えだしたものではなく、アリストテレスやホラティウスをはじめ、ボワローやコルネイユ、ヴォルテールらの近代の著述家の名前も挙げ、先人の議論を踏襲したのだとも明言している(XXVII)。古代の詩人たちはいつでも賢者とみなされてきたし、ゴットシェートの時代でもその名声は十分に有効であるのだから新しく何かを付け加える必要はないと主張している(88)。このような意見表明を知ると、ホラティウスの『詩論』全体が原文で掲載される事実に納得することができる。そういうわけで『文学批判詩論』からは、当時のドイツ人が古代に親しみを抱いていたことがわかる。そしてその後シラーの著作に端的に見て取れるように、18世紀後半になると古代から完全に切り離されてしまったと感じるほどの急速な変化、あるいはエポックメイキングな事件があったことが推定される。それが具体的に何であったのか、どのような現象であったのかについて検討することは今回の研究ノートの手にも余るので、別の機会に取り組んでみたい。

ゴットシェートの文学理論の第三の特徴は、文学と音楽の親近性である。先に彼が文学の起源が詩人による歌の披露にあると主張している箇所を引用した。彼はさらに文学の起源のみならず、言語の起源も歌であったという独自の論を展開している(67ff.)。言語は音声と文字の2つの要素にわけて考えることができるが、ゴットシェートは発声される音としての言語、響きとしての言語を重視していることが読みとれる。文学の基本原則を想像力に依拠しつつ散文による作品、つまり朗読され耳から娯楽的に受容されることを目的とした韻文ではなく、記録など実用的な目的とされる形式も一ジャンルに数えつつ、一方では言語の音声的側面に注目し、発音される言語、美しく響く音としての言語と音楽の関連についても考察している。第二部第二節で扱われているジャンルは、オペラやバレエなどである。今日の基準では、総合的な舞台芸術として芸術論の大きな枠組みで扱われるか、その音楽的要素も重要であるので音楽論で論じられるかが一般的に思われる。ゴットシェートの文学ジャンル体系は客観的事実の積み重ねによって議論が展開されているにもかかわらず、音楽との親近性という非常にオリジナルな部分が含まれている。

#### 4. おわりに

文学理論においては、小説について、あるいは教養小説について、何か「教育的であるべきだ」と主張されていても、それがどのようなカテゴリーに基づき、どこまでの範囲にたいして影響力をもつかをその都度慎重に見極めなくてはならない。論者によって議論の前提となる体系そのものに差異があるので、結果的に何がどこまで有効なのかを総合的に把握しようとする、議論はつねに宙に浮いてしまう。文学に小説が含まれ、教養小説は小説の一ジャンルに過ぎない、とする見方がある一方、ジャン・パウルのように文学とはそもそも小説そのものであるとする立場もある。19世紀初頭の時代の論

者たちの多くが教育的な小説のあり方を支持したのとは対照的に、彼は文学＝小説に教育という社会的役割を担わせることは芸術の本質である機知 Witz やおかしみ Humor を無に帰してしまうと力を込めて反論している。<sup>ix</sup>18世紀以来のドイツ文学理論においては、さまざまな論者が道徳的教訓 Sittenlehre や形成・教養 Bildung、小説 Roman をはじめとする共通の概念を軸に、それぞれ独自の体系を構築している。先人の議論を忠実に継承しているようにみえて、あるいはそのように努力しているにもかかわらず逸脱したり、彼らなりの合理化の結果別の意味へと変化させてしまったり、意図的に転倒させたり、願望や苦悩を無意識に反映させたり、まったく忘れられたはずのテキストの断片が別の箇所にも突如姿を表したり、そのうえ一部が変えられていたり、と実にさまざまな現象を観察することができる。時代を超えた無数の個人の営みの集積としての文化を観察するために教養小説にまつわる議論を軸に検討してみると、分析するには複雑であるが、知識のみならず意識や心理までもが露わになった実に見ごたえのある様相が立ち現れる。

ゴットシェートにとっての小説は、寓話を根本的形式とする文学の体系の内側に位置づけられている。その形式が散文であろうと、内容でおもに恋愛が扱われていようと、徳を提示し趣味を改善し、楽しませつつ教えるという寓話の基本的な機能を十分に果たしうると考えられている。ディルタイの記述によって『ヴィルヘルム・マイスター』以降この作品を基準に確立したと考えられている教養小説は、実際は多数の18世紀小説理論の発展と継承によってこの作品以前から徐々に形成されてきたのだという事実の一端を示せたのではないかと思う。

---

i テキストとして以下の版を用いる。

Johann Christoph Gottsched, Versuch einer critischen Dichtkunst. Unveränderter photomechanischer Nachdruck der 4., vermehrten Auflage, Leipzig 1751. Darmstadt 1962.

本文中への引用は、カッコ内に頁数を表記する。

ii ディルタイは次のように述べ、現在の教養小説理論を決定づけた。「ヒューペリオンは、ルソーの影響をうけつつドイツで内面的な文化に根ざしていたわれわれの当時の精神的方向性から登場した教養小説に属している。その中にはゲーテやジャン・パウルに続いて、ティークのシュテルンバルト、ノヴァーリスのオフターディングン、ヘルダーリンのヒューペリオンがつらなり文学ジャンルを形成していった。ヴィルヘルム・マイスターとヘスペルスによって、このジャンルはその時代の青年のすべてを描き出した。つまり、青年がどのようにして人生の幸福な薄明の中に踏み出し、近い魂を求め、友情や恋に会うのか、そしてどのようにして世界の厳しい現実と闘い、さまざまな人生経験を経て成熟するのか、どのようにして自らを見出すのか、そして世界におけるおのれの使命を自覚するのか、ということである」(Wilhelm Dilthey, Gesammelte Schriften. Bd. XXVI. Das Erlebnis und die Dichtung. Lessing Goethe Novalis Hölderlin. Hrsg. von Gabriele Malsch. Göttingen 2005, S. 252)。

G・ルカーチは教養小説を「問題を抱えてはいるが体験に基づいた理想に導かれたある人物が具体的な社会的現実と宥和すること」と定義している(Georg Lukács, Die Theorie des Romans. Ein Geschichtsphilosophischer Versuch über die Formen der großen Epik. 1994. 2. Auflage. München 2000, S. 117.)。ここにはディルタイの意見を継承しているのが見てとれる。そしてこれものちに続いた多くの議論に影響を与えている。

上掲のテキストが実際にどのように影響したのかについて、たとえば次の例にその典型が見出せるだろう。「1795、96年に出版されたゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は、文学史の記述において一貫して教養小説の典型とみなされている。これは現実との多くの葛藤にみちた関わりの中での個人の発

展がテーマとなっている小説の類型である」(Rolf-Peter Janz, Bildungsroman. In: Deutsche Literatur. Eine Sozialgeschichte. Hrsg. von Horst Albert Glaser. Bd. 5: Zwischen Revoltion und Restauration. Klassik, Romantik. Reinbek 1980, S. 144-163, S. 144.)。

より新しい事例を確認したところ、興味深い現象が観察できたのでここにあわせて紹介しておきたい。2008年出版の Brockhaus 百科事典 (Der Brockhaus in sechs Bänden. Leipzig u. Mannheim 2008) では、Bildungsroman の項目には Roman を参照するように指示されているだけである。そのうえ、Roman の項目でこの概念にかんする記述はわずかである。そこには『修業時代』のみならず、H・フィールディングの『トム・ジョーンズ』(1749)、J・J・ルソーの『エミール』(1762)、M・ヴィーラントの『アガトン物語』(1766/67) が併記され、概念そのものも教養・発展小説 der Bildungs- und Entwicklungs-Roman となっている。必ずしもドイツの作品に限定されてはいないが、時代は 18 世紀に限定され、そこから 19 世紀の多くの作品に影響を与えたというらえ方をしている (Vgl. a. a. O., Bd. 5, S. 383)。この記述からは教養小説は作品の内容を規定するだけでなく、時代区分の一種でもあり受け取ることができる。そのような態度にたいしては筆者の反論や仮説は必ずしも最大限に有効な議論ではないと認めざるをえない。しかしこの辞書の記述に大きな興味を抱いた理由は、小説一般について「小説とは、物語や短編小説とともに、近代において叙事詩を継承したものである。小説は叙事詩とは対照的に、問題をはらんでいると信じられる世界に立ち向かう個人を提示している。短編小説とは異なり、一回の特別な出来事を描くのではなく、ある人物の人生の大半、あるいは人生全体を、その社会的な環境との結びつきにおいて描いている」(Ebd.) と記述されていることである。これはディルタイやルカーチで確認した「個人が社会・現実と衝突する姿を描く」という教養小説の定義と類似しているのである。筆者の仮説は、18 世紀に小説一般の理想像を模索していた議論が、『修業時代』の登場とともに 18 世紀の小説は押し並べてそのような理想像どおりの姿をしていたと 19 世紀以降考えられるようになり、それがディルタイの命名によって教養小説というジャンルに結晶したというものである。トーマス・マンは、教養小説を典型的にドイツ的な小説とよんだが (Vgl. Thomas Mann, Geist und Wesen der deutschen Republik. Dem Gedächtnis Walther Rathenaus. In: Th. M., Sämtliche Werke in dreizehn Bänden. Bd. XI. S. 853-869, S. 854.)、この Brockhaus 百科事典の記述は、18 世紀に小説全般を対象としていた理論が、19・20 世紀に一度教養小説理論へと縮小し、21 世紀にいたってふたたび小説全般に影響を及ぼすようになったのではないかという、あらたな傾向への萌芽を感じさせる。実際にこの動きが進展するのか、この例だけに留まるのかは現時点ではまったく予測がつかないが、ドイツにおける小説理論の移り変わりを観察する上で注目に値するのはたしかである。

- iii 筆者の『修業時代』について主張は、次の拙論を参照いただきたい。Vgl. 北原寛子 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は「教養小説」なのか?—エロスの視点から読み解く— ドイツ文学論攷 第 44 号 (2002 年) 67—87 頁。

近年筆者と同様に、『修業時代』を教養小説の典型とみなすことに困難を感じていると思われる研究者も現れてきたが、長年唱えられてきた説の呪縛を抜け出しきれないのか、新たな角度から無理な根拠づけを行おうとしているのは残念である。Vgl. Liisa Saariluoma, Erzählstruktur und Bildungsroman. Wielands "Geschichte des Agathon", Goethes "Wilhelm Meisters Lehrjahre". Würzburg 2004.

- iv Vgl. Friedrich von Blanckenburg, Versuch über den Roman. Faksimiledruck der Originalausgabe von 1774. Mit einem Nachwort von Eberhard Lämmert. Stuttgart 1965.
- v 『修業時代』の登場後は、ノヴァーリスやフリードリヒ・シュレーゲルの対応にみられるように、この作品を基準にして小説理論を考察することが非常に多くなっていった。これらの小説理論が従来の教育的効果を主張する態度から大きな影響を受け続けていたことや、『修業時代』の幸福な結末がもたらすカタルシスが多くの読者に理想の人生像として受け取られたことが関係し、『修業時代』が登場人物と同時の読者の人間形成 Bildung に寄与するという主張が繰り返しなされるようになっていったことが、さまざまなテキストを総合的に判断して導かれる教養小説概念の成立期である。Bildungsroman という語を用いた最初の例として現在確認されているのはモルゲンシュテルンの 1816 年の論文 (Karl Morgernstern, Über den Geist und Zusammenhang einer Reihe philosophischer Romane. In: Zur Geschichte des Deutschen Bildungsromans. Hrsg. von Rolf Selbmann. Wege der Forschung Bd. 640. Darmstadt 1988, S. 45-54.) である。注 ii に引用したディルタイの 1865 年発表のノヴァーリス論 (のちに『詩と体験』(1905) に所収) まで空白期があるとされているが、こ



18世紀ドイツ小説理論についての一考察  
ゴットシェート『文学批判試論』を手がかりに

の間ドイツで印刷された小説理論を検討すると、小説における人間形成や教育について触れているものが非常に多い。ディルタイはBildungsromanという概念を発見したのではなく、時代の論調を総括し、適切な用語を提案したのである。そのことで彼は18世紀から伝わる小説理論を新たなジャンルとして現在にいたるまで残す筋道をつけたといえる。

- vi 今回この研究ノートを作成するに当たり、第一版、第二版、第三版を直接確認することができなかったことを認めなくてはならない。第四版で初めて小説についての章が設けられたという主張は、以下の文献に基づいている。Vgl. Romantheorie. Texte vom Barock bis zur Gegenwart. Hrsg. von Hartmut Steinecke u. Fritz Wahrenburg. Stuttgart 1999, S. 133.
- vii 日本ではイソップ物語やイソップ童話という呼び名が一般的なのでここではそれに従う。ただしゴットシェートはイソップ寓話die äsopische Fabelと呼んでいる。
- viii この点についてヴェーツェルは小説は「市民的叙事詩」とであると端的に表明した。Vgl. J. K. Wezel, Vorrede. In: J. K. Wezel., Hermann und Ulrike. Erster Band. Leipzig 1780 – Reprgr. Nachdr. Stuttgart 1971, S. III.
- ix Vgl. Jean Paul, Vorschule der Ästhetik. In: Jean Pauls Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Erste Abteilung. Elfter Band, S. 26.